

明治初年日本僧の中国語体験

陳 力 衛

1. 小栗栖香頂と中国行きの時代的背景

明治初年は日本において国内外制度整備の年であった。まずは祭政一致をスローガンとする政府の神道国教化政策・神仏分離政策によってひきおこされた「廃仏棄釈」の運動があり、そして明治四年は廃藩置県により中央集権的統一国家が確立されたと同時に、対外的には日清修好条規も結ばれ、中国との近代的な国家関係を構築していく年でもあった。

本稿の主人公である小栗栖香頂(1831-1905)は、まさしくその時代を生きる人で、彼は大分の出身で有名な廣瀬淡窓の漢学塾咸宜園の三才子の一人として、漢学を学び、漢詩を巧みに作り、儒学の基本經典に精通していた。しかも仏教教理をもそれぞれ専門の大家について学び、八宗の学問を大成したとされる。三十八歳の時、本願寺擬講師に任ぜられたのがちょうど明治元年であった。しかし、仏教界にとっては「廃仏棄釈」の流れに抗しきれず、明治五年あたりから外との連合を模索しようとしていた。その経緯を彼自身の編集した北京語テキスト『北京紀事』の冒頭で次のように中国語で述べられていた。

我們日本国，中古以来，禁止到外国，所以ソレユヘ日本僧人，不知道支那宋朝以後事情，明治元年，才準ユルス到外国，因者个縁故コノユエニ，日本国和尚，遊外国的多，現如上人到了印度，上楞伽山，又到西洋諸国，看看光景，其外，舜台白華默雷蓮城等，或到米利堅，或到英吉利，或到法蘭西，或到奧斯的里亞，我想日本佛經，從支那來，佛經文字，也是支那字，達磨大師，羅什三藏，智者大師，玄奘三藏，賢首

大師等、訳梵經、教僧人、作法事、化人民、又添上ソノウヘ、有五臺山、有天台山、有普陀山、皆佛菩薩示現的地方トコロ、又我喜愛孔子教、想到支那、訪高僧、上名山、(訳：我々日本国は中古時代以来、外国へ行くことが禁じられていた。よって日本の僧侶は中国の宋朝以後の事情を知らない。明治元年にやっと外国へ行くことが許された。これゆえ、日本の僧侶は外国へ多く出るようになった。当今、僧侶はインドへ行く。また西洋諸国へ行き、その光景を見る。その他には、舜台、白華、默雷、蓮城など、あるいは米国へ行き、あるいは英国へ行き、あるいはフランスへ行き、あるいはオーストリアへ行く。私は思うには日本の仏典が中国から来たし、お経の文字も中国の文字である。達磨大師、羅什三蔵、智者大師、玄奘法師、賢者大師などは、梵語の經典を翻訳し、僧侶に教え、仏事を行い、人民を教化してきた。またその上、五台山があり、天台山があり、普陀山があり、みな仏菩薩の顯す場所である。さらに私は孔子教を愛しており、中国へ行って高僧を訪ね、名山に登りたい。)

したがって、かれが多くの僧侶と違って、インドや西洋やアメリカなどへ行かず、中国行きを決行したのである。時は明治六年(1873)で、大分県中戸次にある東本願寺派妙正寺の住職をつとめていたかれはすでに四十三歳であった。その「高僧を訪ね、名山に登りたい」気持ちの高揚とはうらはらに、明治以来、僧侶として初めて実際の中国の土を踏み入れてみたら、逆に仏教の衰微を目の当たりにしてしまった。翌七年に帰国後、かれは浄土真宗の中国での開教を提案し、明治九年、東本願寺当局の理解を得て再び訪中し、上海別院を建てて開教に漕ぎ着けた。こうした壮挙に対して、東洋史学者・京都帝国大学教授だった桑原隲蔵が大正十年六月十五日に開催された弘法大師降誕記念会における講演のなかでも「仏教の逆輸入」と高く評価していた。

「要するに六朝・隋・唐以来、千五百年に亘つて、我が國は絶えず支那の文化を借り受けたが、日清戦役後二十年の間に、國魂の如き立派

な利子まで添へて、その借債を返還した。唯一の未拂として残つて居るのが、宗教だけである。我が國の佛教が、過去に於て支那から大なる借債を負ひながら、今日まで借金をその儘に、支拂はずに棄て置くのは、何としても不都合と申す外ない。是非日本より佛教を支那に逆輸入して、往時の負債を辨償せなければならぬ。……小栗栖香頂師が、上海に布教に出掛けた時、當時の東本願寺の巖如上人は、

日の本の光と共に我が法の教へ隈なくかがやかせかし。

といふ歌一首を詠まれたといふが、その後五十年になんなんとする今日の現状は如何であるか。……若し我が僧侶の努力により、衰へ切つた支那佛教界に、新しい生命を與へ、佛日再び中華の空に光り輝くことになつたらば、それこそ宗祖に對する何よりの大供養と信ずるのである。」¹⁾

むろん、その中国への布教を可能ならしめたのはほかでもなく、彼の一年にわたる北京滞在によって身に着けた語学力が重要な推進力となったと考えられる。

2. 北京口語を習得する過程

小栗栖香頂は、明治六年(1873)7月17日に長崎を出て、19日に上海に着いた。そして海路で烟台、天津へ、さらに水路で通州へと紆余曲折を経て北京にたどり着いたのは8月16日であった。そこで日本人として初めて一人で北京に長期滞在することになった。翌年8月19日に中国を離れ、

1) それに対する中国側の見方が異なっている。「拡張と破滅」というタイトルで示されたように、中国人忻平博士が戦前の日本仏教浄土真宗の在華活動を基本的にこのように位置付けている。いわく「1876年7月3日、小栗栖香頂らが来華して8月13日に上海虹口河南路と北京路の附近に「真宗東本願寺上海別院」を開設することが近代日本仏教の中国への拡張の幕が切っておろされたこととなり、日本仏教が千年の発展を経てはじめてその宗教母國への「逆輸入」を果たし、中日仏教交流史の転換点となったわけである。」と、1997年4月29日毛丹青訪談による。

<http://club.kdnet.net/disppbbs.asp?id=867903&boardid=1> を参照。

9月14日に郷里の妙正寺に戻ってきた。

前述のように、かれは漢文の素養を身に着けており、漢文を読み、漢詩をも作っていたが、しかし実際に北京へ行ってみたら、「文字雖同音不同耳雖不解目能通」(『北京紀事』二十九号)と、書かれた字を見れば意味が分かるが、耳で会話を聞いても一言も分からない。そこで、中国語を習得するならば「不須雅言官話，唯要学俚語俗語」(明治六年『北京説話』)と、「雅言官話」などの書き言葉より「俚語俗語」の話し言葉の習得を目標と掲げてしまう。

自筆ノートとして残っている『幼学須知假名附全』は『幼学須知』(近くの楊朗山について中国の子供たちと一緒に習う中国語の基礎テキスト)をまる写してからすべて日本語の仮名で読みを付けたものである。その8月23日に「北京話 受龍泉寺本然上人相伝」とし、龍泉寺の僧本然から中国語を学び始めたことを記し、基本的なプロセスとして自作の漢文日記を白話文(口語体)に訳してもらい、それに一字一字カナで発音をつけたものである。具体例として「飲食之事」と「寺院部」のタイトルの下に335語の単語を習い、日本語訳をつけている。『北京説話』にも同日の記事があり、そこには自分の稿本をもとに本然師に直してもらった経緯を伺うことができる。それに続いて26日に「天涯孤客之苦況，無甚於病中，試記病中之事，乞以俚言改之」と前書きして、具体的に「清慈庵病中之事」というタイトルで自分の病気の様子を北京口語で記されている。さらに29日に「記賽雍和宮的事」があり、9月2日に「記天津楊某之事」が続いてあり、三話で合わせて635句と、著者が最後に記録している。たとえば、次の一例を見れば、彼の習得過程を知ることができよう。

最初の『北京説話』と題している冊子では「記天津楊僕之事」と漢文体で書かれた文章に続き、そして同じ冊子に今度は会話体の「記天津楊奴之事」というのがあり、そこに師と仰ぐ中国人の僧本然の書入れが多く見られ、一々用語や言い方を会話文らしく直してくれている。それから直され

たところを書き入れて、さらに日本語訳をつけたのは上記のノートとして残っている『幼学須知假名附全』にあった「記天津楊某之事」であり、最終的にテキストとしての『北京紀事』の確定原稿では第九号「記天津楊夥計之事」と清書される。下線部の「僕 奴 某 夥計」へと文体や用語が徐々にくだけて口語的になってくるのがわかる。

著者自身の作品に「北京」と冠するものは「游記」「説話」「紀事」の三種類がある。時代的な成立を見ていくと、さらに日記「八州日歴」が先にあって、その「八州日歴」31~38（明治六年七月一日から明治七年九月一日）に留学の種々な出来事や自身の努力が漢文や日本語で書かれている。それに基づいて漢文の「游記」を編纂し、そして「説話」へと文体の調整をし、最後に口語体の「紀事」の成立が見られるわけである。

「まず第一に注目させられるのは『北京紀事』上下二冊（五三枚、七一枚）で、これは香頂師が明治六年北京に留まっていたころ、龍泉寺の僧本然から華語をまなび、その教材の一つとして自作の漢文日記を白話訳してもらい、それに一字一字カナで発音をつけたものである」と魚返氏が指摘している²⁾。現に残っている『北京紀事』は本願寺の縦書きの罫線（13行）の用紙（26×17cm）に書写されている。その凡例によれば、「明治六年七月、予支那二入り、明治七年八月帰朝ス。本書は六年七月以後（ヨリ）十二月二至ルマテ、目覩耳聴（実践）セシ者ヲ記シテ」、そして「本書ノ原稿ハ、予カ漢文ニ係ル。予初メ言語ニ通セサルヲ以テ、半年間ノ事ヲ記シテ、龍泉寺本然師ニ北京俗語ニ改作センコトヲ乞ヒシニ、然師其煩ヲ厭ハズ、予カ為ニ漢ヲ転シテ俗トナス。其切々僂々ノ老婆心、予カ懐ニ往来シテ、依々恋々忘ルルコト能ハズ、故ニ之ヲ宗主ニ白シ訂正刪補シテ、集テ上下二冊子トス。」と明治八年十二月十五日づけで記されている。

つまり、これは中国から帰って一年あまりの間隔があって、最終的に完成された北京語テキストである。毎号の文章の長さは一定しないが、長い

2) 魚返善雄 (1947) 14 頁

のは6頁、短いのは3頁しかない。それぞれのタイトルがあって、本文は一つの事柄を記述している。たとえば、冒頭の中国行きを決意した文章は第一号で「記明治六年六月二十五到上海的事」というタイトルをつけている。文中では短い句の単位に二三文字分のスペースを置いてさらに読点で区切っている。その区切り方は日本語のテニヲハの感覚で、加えて中国語のポーズの置き方に留意しているように見える。そして、ほとんどの句の区切りのところに日本語による対訳があるから、日中の対訳資料としても利用できる。「所以ソレユヘ」「準ユルス」「縁故コノユエニ」「又添上ソノウヘ」「地方トコロ」のように、日本人の中国語学習者として同じ漢字語に異なる意味を積極的に対訳の形で記している。ほかの号に、

我地起根尔，我八生来

不会算盤 算用ニウトヒ

算盤的事情，悶的狠拉 算用ノ事大ニワツラハシイ

問，房飯錢多少 席料飯代何ホト

又拿剪子截銀子 大ナルハサミヲ以テ銀子ヲキリテ

と、長短区々の対訳があり、基本的に右ルビは中国語の読みを示し、左ルビは語釈や意味を示している。さらに『北京紀事』の目次の最後には「二百余言各号の標目ト及造語ノ新奇ナル者トヲ摘出シテ以テ搜索ニ便ニス」とキーワードを中心として各号に配し、大方の内容を把握させることに努めている。

そうした北京語習得用のテキストには当然ながら著者自身の体験に基づく感想が方々見られる。たとえば、

中国の発音は日本のものと異なるため読みにくい。我々日本の方では、先に体言が来て後に用言が来る。中国ではその逆となる。だから日本では、「飯を食う 酒を飲む」と言う。中国では「食う飯 飲む酒」となる。日本では「帽子を被る 靴を履く」と言うが、中国では「被る帽子 履く靴」となる。また、日本が応神天皇即位十五年の時、

漢字がはじめて日本に伝わった。中国の晋朝武帝太康五年の時である。今年に至るまで千五百三十年余りたつ。そのときシナの音がはじめて日本に伝わったのである³⁾。後に唐の時代、日本の使者並びに高官がシナに行ってシナ音を学び、日本字をもって唐朝の音を書き写したのは古韻であり、今日に至るまで変わっていない。現在の日本の音は広東と似ており、南京とも似ている。詩を読む際の音は北京と同じで、上海とは異なる。二字音は上海と同じで北京とは異なる。日本人は漢字を読む際、日本語をもって訳すが、しかし地名や官名、人名の字を読むときは古音を用いる。(『北京紀事』第二十九号)

つまり、まず語順について、日本語は体言が先に、用言が後にくることを述べ、日本では「飯吃、酒吃」というのに対して、中国語ではその逆の言い方をする。そして漢字伝来の歴史を振り返って日中間の漢字の発音の違いに言及し、北京語との相違にも留意していた。

そうした日中の違いは結局のところ、北京語について知識の増加とともに体験されてきたもので、それゆえに、北京語の重要性と位置付けについても『北京紀事』の凡例にはっきりと記されている。

支那各省、其音各異ナリ、長崎二製スル二字話三字話等ノ音、北京二用ヒカタキ者アリ。又綴語ノ体裁モ異ナレハ、上海浙江等ノ僧、北京僧の語ヲ解シ得サルコト、予カ目撃スル所ナレハ、本書モ惟北京行ノ者ノ為ニ設ルノミ。

北京八清帝首善ノ大都ナレハ、外省人輻湊セサルナシ、故ニ北京話ハ外省ニ通シテ、外省話ハ北京ニ通セサルコト。本末自然ノ理数ナレハ、本書亦或ハ外省二用ユベキアラン。予上海二回り、北京話ヲナス

3) 『日本書紀』などの記述によれば、応神十六年百済の王仁が諸典籍をもって日本にやってくるという。それを換算すればたしかに西暦二八五年に相当し、ここでいう「今年に至るまで千五百三十年余りたつ」とは合致するが、しかし、同じ出来事を記録する朝鮮の『三国史記』に照らしてみれば、応神十六年は四〇五年に相当するものとなる。つまり『日本書紀』の朝鮮関連記事は干支を二巡、すなわち百二十年繰り上げるという操作を施しただろう。

二、書肆葉舗、往々解シ得ル者アリ。

従来、江戸時代から長崎で伝わっていた唐話は「北京二用ヒカタキ」として、中国各省「其音各異ナリ」のをいち早く悟っただけでなく、都としての北京語は使用範囲が広く「北京話八外省二通シテ、外省話八北京二通セサルコト」も認識している。前者については、彼自身の経験談とも言えよう。たしかに中国へ行くまえに小栗栖が長崎の聖福寺にて陳善、無等に中国語(唐話)を習ったことがあり、中国へ行くときに持参していたものに、その『二字三字話』なる教科書も入っていることが『北京游记』に記されている⁴⁾。後者については、いわゆる日本における中国語教育を従来の南京や杭州などの南方音のことばから北方音の北京語へとすばやく転換させた最初の人として、その慧眼が賞賛すべきであろう。というのは日本では明治九年(1876)あたりから当時の東京外国語学校でようやくその転換の必要性を意識し始めたからである⁵⁾。

そして、小栗栖香頂自身の考えている理想的な北京語習得プロセスはこうである。

予想ニ北京話二通スル最上ノ上乘八、英人ノ撰セシ語言自邇集ニ如

-
- 4) 「北京紀游」によれば、「二 携帯物品 此遊所携帯物品、彌陀佛一龕、名号一軸、三経、七祖無門関、御本書、唐音禅門仏事、二字三字話、和漢年契、支那地図、新旧両曆、冠、袈裟、袍衣、襪衣、単衣、葛衣、綿衣、枕、被、褥、蒲団、蚊帳、毛布、褲子、鞵、靴(支那製)、褌、拭巾、皮箱(支那製)、文庫、錢囊、錠、印、念珠、沈香、墨、墨斗、墨硯、朱、朱肉、朱硯、大筆、小筆、竹紙、和紙、半紙、塵紙、封筒、燐寸、蠟燭、扇、団扇、小刀、剃刀、剪子、磁針、時辰器、寒温器、茶碗、箸、土瓶、疝癩藥、葛根湯、三味湯、真珠、眼藥、石綿、萬金膏、寶丹、鯉、焼酎、麦酒、茶、梅干、冰糖、洋辛、以下数件。」とある。その『二字三字話』も小栗栖の所蔵として現在でも実際に確認できる。
- 5) 六角恒廣(1999)「穎川重寛 唐通事から漢語教師へ」によれば、明治九年「中田敬義ら三人を北京へ送り出してから、穎川重寛は、なんとなく一抹のさみしさを覚えた。漢語学所から数年教えてきた唐話の南京語が北京官話にとって代えられる時代が来たのであろう。それにしても長崎において二百数十年も伝承された唐話が、辛くも生き延びて、明治の時代になっても自分たちの手で細々と承継がれてきたことを思うと、何やら自分たちの寿命も、そろそろ尽き果てるときがやってくるような気がしてきた。」という。(27頁)

ハナシ、然レドモ予カ本然ニ受ケサルヲ以テ、妄ニ授ケズ、試ニ課ヲ分テ、首ニ三部経ヲ授ケ、次ニ四書ヲ授ケ、次ニ本書ヲ念セシメ、而メ後ニ自邇集ヲ体シテ、北京ニ入ラハ、言路ノ窮途ニ哭セサルヘシ。

(『北京紀事』凡例)

つまり「はじめに三部経を授け、次に四書を授け、次に本書(北京紀事)を念せしめ、而して後に自邇集を体して北京に入らしむ」というのがかれの教授案であった⁶⁾。ここで驚くべきことに、かれが北京滞在中の1874年5月に直接イギリス公使館に公使トーマス・ウェードの編集した北京語テキスト『語言自邇集』を借りに行ったことがあり⁷⁾、そして上記のようにそれに対しての高い評価を与えたことである。日本における中国語教育でのちに『語言自邇集』をテキストとしての利用開始よりずいぶん先んじていることを考えれば、その先見の明がわかる⁸⁾。

3. 言語資料としての価値

かつて魚返善雄は小栗栖香頂の残された中国語記録資料について、次のように述べている。

純粹に語学的なもの、または内容が仏教であっても形式が語学に属するものについては、少なくともその一部分を華語華文学関係者の手で整理し公開することが、僭越ながら一種の義務ではないかと考える。香頂師がこれらの記録を作られてからすでに七十年、世を去られてからでも四十年の歳月が流れている。その間、これら貴重な文献は、仏

6) 魚返善雄(1947)14頁

7) 「北京紀游」によれば、「九十二 訪英館 五日同嶋・中村二氏訪東江米巷英館。一官人有雅芝出接。余請借覽英国欽差大臣所著『文件自邇集』・『語言自邇集』。曰「近日取之上海、送呈。」公使威氏、館人三十余名。」とある。

8) 六角恒廣(1999)『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』によれば、『語言自邇集』が東京外国語学校に購入されたのが明治9年6月以降であり、その後、それによる中国語教育も始まったが、本格的に日本で普及したのは廣部精によって改編された『垂細垂言語支那官話部』の出版(明治十二年(1879)六月)を待たさなければならなかったという。

教関係や伝記的な部分が若干公表されただけで、語学的、一般文化交渉史的には、ほとんど取り上げられず、むなしく埋もれてきたと言ってよい⁹⁾。

この苦言を呈してからもまた六十七年を過ぎようとしている。

「一般文化交渉史」としての資料整理は魚返善雄自身が1957年から1958にかけて小栗栖香頂の『北京游记』を「同治末年留燕日記」(上下)と題して大学紀要に載せて公表した。その後、長い空白期を経て、近代日中仏教交流史の研究に携わっている陳継東は長期にわたる資料発掘と一連の論文発表で日中文化交流史、ことに日中仏教交流史における小栗栖香頂の貢献と位置付けを明らかにし、研究史に新しいページを開くこととなった。しかし、語学的にみれば、小栗栖香頂の記録した資料について、「それが岡島冠山と現代との中間にある大きな峯」として高く評価し、何よりも「口語で書かれているというところに大きな意義がある。」とも強調していたにもかかわらず、魚返善雄自身は「発音記号の合理的なこと、自己教育の教材の選びからの適当なこと、言葉に対する態度がすなおで、また何びともまして辛抱づよく克明であること」の特徴を三点挙げることに止まっていた¹⁰⁾。その資料の語学的解明と整理がいまだに進んでいないのが現状である。

そういう意味において、本稿では次のように小栗栖香頂の記録した北京語の主な特徴を、語彙・文法・表音の順にスケッチしてみようと思う。ここに使う資料は『北京紀事』はもちろんのこと、『北京游记』、『北京説話』、そして『幼学須知假名附全』などが含まれている。

3.1 語彙

3.1.1 語釈

9) 魚返善雄 (1947) 11 頁

10) 同上 12 - 13 頁

日本人の僧円仁が中国語で書かれた『入唐求法巡礼行記』が唐代の口語俗語を反映する資料として中国語研究に利用されているのが知られている。小栗栖香頂の記録した北京語は量的にはそれに及ばないものの、やはり口語体であることと、俗語の使用と意味の確認可能が注目される。ここでは語釈対象となるものは『北京紀事』の本文から抜き出した語句と、さらにその末尾についてある「支那北京説話」という中日対訳語彙集にある語句である。前者には語句の右側に中国語の読みをつけて、左側に日本語の意味をつけるもの（たとえば、「巡按」に右ルビ「シユンガン」、左ルビ「ヤクニン」、「食盒」に右ルビ「シーホー」、左ルビ「ベントウ」のように）もあれば、割注の形で句全体の意味解釈や語の説明をするものもある。次に中日の意味的対訳においてやや特殊なものをとりあげてみよう。

【上下】*^{ワエンクイチヤホーシヤン}問貴刹和尚^{シモシヤンシヤ}、甚麼上下上下トハニ字ノ名ノコト

「上下」とはいわゆるフルネームで、姓と名をあわせて言うことである。中国の『漢語大詞典』では1940年代の田漢の脚本の例しか挙げていないが、ここでは19世紀末期の実生活の口語例として注目すべきである。

【找靴】クツヲ吟味サセル

中国語として「靴を探す」意味は明白だが、日本語訳として「吟味する」対象は詩文だけでなく、臭い靴をも含むことがやや意外である。物事をよく調べる意に使われるからだろう。

【脚植子】クツダイ *我云、九月十九日、付你洋錢一个 買煤一百斤、買木炭十斤、算算多少錢？他云、煤四吊二百、炭二吊、脚植子四吊、煤簍子一吊、共合十一吊二百文。

『日本国語大辞典』ではクツダイを調べれば、「靴台・沓台」にあたるが、上記の文脈では通じず、むしろ「足代」の意味として理解したほうは文意が通じる。

【架房】^{チヤフハン}雪院ニユク *我昨日晚上拉痢十几回、架房風冷的利害仿弗針筭的是的。

日本語訳をもってはじめて「架房」がトイレであることが分かるが、「雪院」は当時の日本語として「雪隠セツチン」と読むべきところを、あるいは小栗栖が「セツイン」と誤読していたからこそ、「雪院」への交替を可能にしたかもしれない。

【小心】* 曰、他多大歳数？ 曰、三十八。曰、他知道北京客店不知道？ 曰、他上好几回京，都知道。曰、他小心不小心 彼八正直ナリヤ？ 曰、小心。

「小心」は「気をつける、用心する」意味で理解されるのが普通だが、ここでは「正直」の意味にとられるのは北京語の用法か、あるいは文脈においてその意味での理解の可能性を示唆。

【好貪財】* 朗山曰、王二者个人不可用，此人好貪財 油断ハナラヌ，不顧朋友交情。

ここに「好貪財 油断ハナラヌ」の対訳も文脈に沿っての理解で、「好貪財」は「貪欲」の意味で、「油断ハナラヌ」は「用心すること」で単独に抜き出して考えると、語訳としてはやや意味的に広い。

【干老】* 想以掌櫃為干老 シヤン イ チヤンクワイイカンラヲ コノ亭主ニ親分ヲタノミタヒ

一般の意味として中国語の「干老」は「義理の親爺」とされるが、この日本語訳は「親分」でむしろより適切に意味をとらえているように思われる。

【揣窩】* 又有没有石頭的地方 ツワイウヲ ユウヨウ ムエ ヨーシートーティテイフハン オリオリ石ノナヒ所モアル、揣窩道二凸凹ヲホキコト、難走、車是乱奔 ツワイウヲ ナツツウヲ チヨ シ ロワンボン チ ホイボン ラ ウヲテイナヲタイ ムヤミニ走ル、幾回碎ウツ了我的腦戴タ
ピタピ車ノ柱ニ頭ヲ打ツ、
* 道尔揣窩多道路殊ノ外アシ タラル ツワイウトー

道の悪いこと、「道二凸凹ヲホキコト」と解釈しているが、その「揣窩」が一般の辞書に収録されていない。

【鉢羅蓋】* 鉢羅蓋底下浮腫膝ノ下ハレル ボーローカール ティシヤ フツン

著者自身が師の本然から聞いた解釈では満州語から来た語という¹¹⁾。現

に東北，山東，内蒙古，安徽，河南中部に広く使われている。

【屎球】* 上人哈哈一笑 曰朗山亂說 他是屎球 男色先生ナリ

本来は字面通りの「くそ」そのもので，罵詈雑言として使うのが普通だ。

ここで「男色先生」と対訳されるのが臨時一時的なものだろう。

【鬧鬼】* 命弟婦作之 免鬧鬼ワタヌミ換 你的棉花 工錢多少不論
男工價大 伊必以舊棉花換 你的新棉花

「鬧鬼」はふつう不可思議なことを指すが，ここでは文脈に即して「綿盗み」と訳す。

【等子】* 京都錢店兩替室，拿一个等子 一ノ小キ天秤ヲモツテ，等銀子 銀
ノ重サヲハカル，看分量分量ヲミル
* 他把等子 小キハカリヲ出シ 等了一等 洋銀ヲハカル

「等子」は名詞として「秤」「小キ天秤」の意，「等」は動詞として「量る」意味に使う。

【悶】大ニワツラハシイ * 一个字也不會 一字モシラヌ，悶的狼拉 不自由ナル
コトデアリタル，

心情を表す「悶」はここにある「大ニワツラハシイ」や「不自由ナルコト」の解釈が重要で，ふつうの北京語方言辞典などを調べてもそのような意味記述が見当たらない。

以上のように，この『北京紀事』にある北京語の俗語としての使い方や意味はいままでの辞書においてはほとんど記述されておらず，当時の意味理解の手助けになるために，言葉の意味を丁寧に記録しておくべきだ。さらに，「我再四思想，實一難事。」のように，今日では「再三」というべきところを，「再四」と表現する点についても留意すべきである。ほかに，

11) 『北京紀事』の凡例によれば，「北京八滿漢蒙蔵四国ノ都会ナレハ，蒙古語ヲ以テ漢字ヲ念スルアリ，給ノ字ノ如キハ北京音「チー」也，蒙古人ハ人ニ物ヲ施ス「カエー」ト呼フ，故ニ給ノ字ニ「カエー」ノ音ヲ施ス（黙スル）ハ蒙古語ノ錯韻セシニ係ル。又滿洲語ノ北京ニ入テ，自然ニ北京語ト成ルモノアリ，膝骨ノ事ヲ鉢羅蓋爾ト云カ如キハ滿洲語ナリ，已上ノ二事ハ，本然ノ口授ニ係ル。」のように，滿洲語から来たものとされている。

日中の対訳としてとくに問題にならない例もつぎのように挙げておく。

【有氣】立腹スル、【税館】運上所、【眼子】シリノアナ、【動身】* 你動身
 時候君ノ出立ノトキニ、【白】* 白帶來ムダホ子オリ、【花多少錢】* 進寺留
 学花多少錢 菓子料八何ホト、【詹尔】^{ヤアル} * 我連詹尔也没跨^{ウレンヤアル エメクワ} 故ニ我八車ノ端
 ニモノラヌ、【哈嗎】^{ハ マ} * 問^{ウェン} 哈嗎^{ハ マ} 是麼東西^{シ モトシ} 答^タ 三 条 腿 為 蟾^{タアサンテヤウトイウイチヤンスーデヤウトイウイハー}
 嗎、【大夫】^{マ タイフ} * 有一个^{ヨーイコ} 大夫^{タイフ} 大夫ト云モ医者ノコト

もう一つ纏まった中日語彙対訳表として『北京紀事』に附している「支那北京説話」というのがある。そこには「記人倫的事」(225語)「記身體的事」(174語)「記飲食的事」(144語句)「記地理的事」(294語)と四つの部立てがあり、全部で837語を集めている。ここでもその特徴的なものを取り上げてみようと思う。

記人倫的事

まず、自分の妻と他人の妻を表す語として、下記の表現が見られる。謙讓語としての表現は尊敬語より多いのが特徴であろう。

内人ツマ、家裏ツマ、媳婦爾ツマ、老婆ツマ、婆娘ツマ、女人ツマ、賤人ツマ、拙荊ツマ

令正 人ノツマ、貴夫人 貴人ノツマ、オクサマ、太夫人 貴人ノツマ、オクサマ
それから「ひめ」をもって遊女を表している。これは『日本国語大辞典』においてもそう記述している¹²⁾。

蛮姐爾ヒメ、娼婦ヒメ、妓女ヒメ、妓者ヒメ

さらに、次にある下線で示す北京語表現も同じ類義表現の一種であるが、ふつうの辞書に収録されないものなので、こうした日本語の対訳によって意味を確認できる点が注目される。

偷人ヲトコズキ、偷嘴吃ヲトコズキ、打野食ヲトコズキ

12) 近世上方で、遊女をさしている。* 浪花聞書(1819頃)「おやま遊女なり。女郎とは先づいわず、けいせいとも云。又云、其場所にては女中、ひめ杯と唱ふ」* 随筆・守貞漫稿(1837-53)一九「姐とは専ら遊女を指と難ども、又婦女の惣称にも云也」

争フテカケニ音スルツマ、争鶻子吃テカケニ音スルツマ

再蘸 再嫁，再嫁人 再嫁，抬身 再嫁，再嫁 再嫁

記身體的事

核桃骨キビスクルブシ，小腿コブラ，鉢羅蓋ヒザ，迎面骨ムカフス子，腓股
蛋シリコブラ，勒ドウ，髑髏アタマ，體アタマ，大陽ピン，天額蓋ヒタヒ，
天亭ヒタヒ，饒舌シャベリ，長舌シャベリ，利口シャベリ，脅肩ヘツラヒ，大
指オホコビ，人指ヒトサシユビ，食指ヒトサシユビ，二指ヒトサシユビ，中指ナ
カユビ，色指ナカユビ，無名指ベニサシユビ，四指ベニサシユビ，小指ココビ
体の部位を言う表現が多いが，日本語の語釈をもって「大陽ピン」「利
口シャベリ」「色指ナカユビ」と，その意味を確認することができよう。なか
には「色指」の言い方が稀で中国語の辞書には登録されていない。

記飲食的事

早飯アサメシ，午飯ヒルメシ，晌飯ヒルメシ，晩飯ユウメシ，夜飯ユウメシ
買酒サケヲカウ，打酒サケヲカウ，焼酎 焼酎，玫瑰露ヨキサケ 銘酒，黄酒
紹興ノサケ，紹興酒 紹興ノ酒，老酒 紹興ノサケ，五加皮酒 銘酒，木瓜酒ホ
ケサケ，瑛元紅酒 銘酒，酒瓶サケトクリ，酒壺サケトクリ，酒素子 銚子，
酒鐘サカツキ，酒盃サカツキ

作開水 湯ヲワカス，不熱マダワカス，没開マダワカス，不開マダワカス，就
開マダワカス，開刺 湯ガワヒタ

飲食関係では中国語の「夜飯」に対して、「晩飯」と同じく、「ユウメシ」
をもって対訳しているが，今日使われている「ヨルメシ，ヨルゴハン」の
言い方がまだ現れていない。酒に関して、「黄酒，紹興酒，老酒」がいず
れも「紹興ノ酒」を指しているのがわかる。まだ北京の生活を如実に反映
させる「湯を沸かす」一連の表現が日常的に不可欠なものであるように見
受けられる。

記地理的事 チーティリーティシー

京師チンスー，盛京チオンチン，直隸省チリーション，山東省シサントンション，

山西省シサンシーション, 河南省ホーナンション, 江蘇省チアンスーション, 安徽省アンホイション, 江西省チアンシーション, 福建省フーチョンション, 浙江省チュウシーション, 湖北省フーベイション, 湖南省フーナンション, 陝西省シヤンシーション, 甘肅省カンスーション, 四川省スーチエンション, 廣東省コウントーション, 廣西省コワンシーション, 雲南省ユンナンション, 貴州省クイチヨウシヨウ, 察哈爾チヤハール, 吉林チーリン, 黒龍江ホイルンチヤン, 伊犁イリー, 青海チンハイ, 西藏シーツァン, 内蒙古子イモンクー, 外蒙古ワイモンクー

上記の地名は清朝時代の行政区域を反映するもので, 本来は「京師, 盛京」と各省の行政単位の下にさらにそれぞれ「順天府スンテンフー」「奉天府フオンテンフー」など「府」の行政単位もあるが, ここで省略した。それ以外の地名, たとえば「察哈爾」以下には「府」の単位がない。これも一方では清朝の統轄様式を反映させるものであろう。

3.1.2 児化

北京語の発音上の一大特徴はこの「アル化」が挙げられる。小栗栖自身もそれを「北京語学必由ノ門戸」として下記のような理解を示している。

北京人「ラル」ノ音ヲ用ユルコト, 極テ多シ, 菜刀ヲ「サイタル」ト念シ, 茶館ヲ「チャコワル」ト念スルコトキ, 枚挙二違アラズ, 本書中ニ^ラ了^ラ而^ル尔^ルノ字面ヲ用ルコト, 此語路ヨリ出テ来ルナリ, 又拉尔ノ字ヲ用ヒスメ, 「ラル」ノ点ヲ施スモノハ, 語路二随テ, 文字ヲ省クノミ。是北京語学必由ノ門戸ナリ。(『北京紀事』凡例)

ここで「アル化」を表すのに, 仮名表記は「ラ, ル」の二種類, 漢字表記は^ラ了^ラ而^ル尔^ルの四種類を用いると言っているが, 実際にはさらに「児, 爾」を含めてもっと多彩な漢字表記をしているのがわかる。

名詞 花: 様子^{ヤンツ}彷彿^{フハンフシヨ}蒼^{エホワル}兒
那: 我們^{ウラメン}那^{ナル}尔^ル 愛^{ガイ}走^{ツウ}的^{ウチク}快^{クワイトン}東^{シー}西^ン日本^{ニッポン}人^{ジン}八^{ハチ}快^{クワイ}走^{ツウ}ノ者^{シヤ}ヲ愛^{アイ}ス

明治初年日本僧の中国語体験

- 鼻：^{ナ シエンチュウワンチヨンピール} 拿線穿針鼻尔
- 一回：^{イ ホル タウ ラ シヤンハイ ウラチヤウホー チ シヤンリーベンクンコワン} 一回爾シバラクシテ，到了上海，我叫夥計上日本公館，
^{カウンスオウワライ ラ} 告送說我來拉我ノ来タコトヲ申シアケヨ
- 道：^{ワイシヨントラル サイタルシヤン リーベンコワトンチン ヨー イ コ テー タル} 外省道尔 / 在道上 / 日本國東京 有一个鐵道尔
- 套：^{チユワンツライン チ チヤタル} 穿着銀指甲套尔 銀ノ護爪ヲハメル
- 面：^{ニー ソル スー フウ エリヤンアー チエンメー ル ツ コートー チヤン} 你面尔似乎月亮阿 / 見面尔 都蓋頭頭ヲ地ニツケル / 掌
^{クイユマイヤン プ ツラメー ル サイハウ} 櫃曰買洋布 作面尔 木綿ヲ以て面ヲ作ルヘシ才好
- 頭：^{ナンペイトンサン メ ル ヨーサン コ コータン ウラツサイベイベルトントー ル} 南北東三面尔，有三个客堂，我住在北邊東頭尔壁
- 邊：^{リヤン ベ ル シーヤンコワン タアチラ ハウチラ} 兩邊尔西洋館，大極拉，好極拉大ナリ美ナリ，
- 衫：^{チユワンホワンチヨウ ツ タアシャル テイ} 穿黃緞子大衫尔の
- 一点：^{イ テル エ プ カンチン ヨー テル ウヲ} 一點尔也不乾淨少分モ清淨ノ処ハナヒ / 有點尔餓空腹ニナリタ
^{チ テル シ モ} / 吃點尔甚麼
- 嬢：^{ヨー イ コ シヤニヤンアルメン ヨー イ コ ニヤル メン} 有一个瞎嬢而們一人ノ盲女アリ / 有一个娘而們一婦人アリ
- 様：^{ウラサイチチーノコワンレンシンフヲティシヤン ル} 我才知支那官人信佛の事様而
- 風：^{チンル コテン チ ハウ イ テン ホ ル エ メ ヨー} 今日个天氣好 一點風尔也沒有
- 影：^{シ ヤンウイティチウティヤン ル} 西洋爲地球的影尔
- 頂：^{ツヲウタウユンホーグンテンティン ル シヤン} 走到雍和宮殿頂尔上
- 明：^{ミンルサヲシンチライ} 明尔早興起來
- 副詞 静意：^{ユエクーチヨトール チエン ユエニーヤウチン イ ル ク タア コ} 日雇車多少錢 日你要静意尔雇他ワザト雇ヘハタカシ 可
^{チウクイ} 就貴
- 起根：^{ウラティ チ コ ル トーピン} 我地 起根而多病
- 動詞： 哭：^{ウラサイチエンツッソニーレンコールティヤン ツ プトンウヲメンリベンコウ タレンコー} 我才見中國女人哭尔的樣子 不同我們日本國 / 他人哭
^{ル カン} 尔看
- 吃：^{ツン シ チュン メ ヨー チ ル イワン ク} 揔是窮 沒有吃而緣 故食物ナキ故二

3.1.3 同音による異表記

同音による異表記の問題は白話小説や口語体の文章によく見られる現象

で、とくに正字法の視点で眺めるとき、今日との差は歴然であるが、ここではむしろ北京、あるいはその中国語の先生の個人の特徴の反映とみてよかろう。文中において「是的 似的 / 拉欠 拉織 / 者个 这个」などのように、矢印の前の表現をとるのが普通であり、また、「大轉(賺)錢 大ニカ子ヲモウケル / 不董(懂)天津話 / 等一回(會)尔」のように括弧内の現代語的な言い方をしない。次によく見られる同音表現を挙げておく。

合 和：シヤンウヲホー シ ヒコトシツ ツ イ コウー ツ
 想我合師兄同住一个屋子師同居シテハイカド
ル ヨーリーベンレンライ ウヲホータアトシチュイ ニーロアサン ラ シユエシヨシ ホー
 如有日本人來，我合他同去日本ト同ス，你若散了學生，和
ウヲトシツー ル ウヲチュイ スイクン チ ニー
 我同住，如我去，誰供給你

但 呆：ウヲシヤンツンコワニーツ タンザイ ウ ツ リ プ チユイタアチエシヤン
 我想中國女子 但在屋子裏 不去大街上

望 住：イーワンシヤンハイシヨウシ
 欲望上海捐信上海二書ヲ送ント欲セハ

直 只：ウヲ メ ヨーフアツヲ チ ハウツヲウホイライ
 我没有法則致シカタナシ 直好走回來已ムコトヲ得歩シテ回ル

模 抹：マイチンホイ モーツワンフン
 買青灰 摸磚縫 瓦ノ合セ目ヲヌル

さらに軽声によるものも多い。たとえば、

早上 興：ミンルサラシンチライ
 明早興起來

告訴 送：シヤンタラレンカラスンタアラ
 想道人告送他拉

最初の例に見られるように、すでに「合、和」が混用されている。小栗栖自身がこの現象について、「然師ノ一時偶誤シテ他字ノ音通ヲ用ユルモノモ亦之ヲ改メ作ラス、惟北京俗語真面目ヲ存センコトヲ注意シテ文字字義ノ如何ヲ顧ミサルナリ」と『北京紀事』に記し、こうした音通による漢字の代替は師と仰ぐ本然の言語使用の実態を反映するものとされている。

3.1.4 新漢語の伝播

冒頭の引用文でわかるように、明治初年という時代に、日本僧も西洋などにわたって向こうの様子を見学したりするぐらい、外への関心が高まっていた。いわゆる新事物・新概念が日本に持ち込まれ、使われる時代でもあった。『北京紀事』、『北京紀游』に出ている新語を拾ってみたら、まず、

電信線，電信機，火輪船，火輪車，天主教，瓦斯燈，鉄道，感応，電
氣，テンウンテイリ国際，天文地理

といった語が目につく。そのうち、「瓦斯燈，国際」が純粹に日本で作られた和製漢語として知られる。そして音訳語としては「野列氣エレキ」も日本で訳されている。

チヨイトウエーレーチー
* 者一頭野列氣，一方ノ電気ト イ ナ イトル エ レ チ シヤンカン 與那一頭野列氣 相感，彼方ノ電気ト感應
チウ シン カン イン テイ リ
スル 就是感應的理，

この「野列氣」の音訳は蘭学時代の訳語で、本来日本語だけに限って使われているもので、中国語としては通用しない。一方、その訳語として使われている「電気」は逆に中国近世洋学資料に使われていて、幕末期に日本に入った言葉である。なぜ小栗栖が「電気」を本文に使わなかったのかわからないが、可能性としてかれが日本に戻ってから「電気」のほうが一般化したかもしれない。

同じ音訳語として「単 town」も注目すべきである。

* 有法蘭西単，有大英単，有鄂羅斯單，有米利堅單。單者地坊也，一
單内有多少街巷

と、上海における各国の租界地の描写に使われている。そして「単者地坊也，一單内有多少街巷（地域を表し，中には多くの通りが含まれている）」と解釈も続いている¹³⁾。

むろん，上記の地名表記語も音訳であり，「米利堅ノ垂墨利加アメリカ，英吉利イギリス，鄂羅斯ロシア，法蘭西フランス，奧斯的里亜オーストリア，上海シャンハイ」などが挙げられる。

さらに小栗栖と本然の会話には漢訳洋書の『瀛環志略』にも話題が及んだが，実際に小栗栖から本を借りて読んだ本然の感想は，その書は中国人を驚かせるためのものであって，西洋人の言説を主に展開されたもので，

13) 現に北京には「東単」「西単」の地名があり，もしこの解釈でいけば「East town」「West town」の訳語の可能性も出てくる。

信憑性のある歴史書ではないという返事が返ってきた。漢訳洋書の中国での評価が低いことを物語っているひとコマである。

3.2 文法

3.2.1 人称代名詞+地,的

人称代名詞の後ろに「地,的」をつけて主語を際立たせる表現が日本人の中国語習得過程における独自のものとも見受けられるが、実際の中国語口語資料にはそういう表現も見られ、ポーズを置く役割を果たしている。

ウヲティワンリクコー ニーエ シワンリクコー
* 我的万里孤客,你也是万里孤客

ウヲティ チ コル トーピン
* 我地 起根而多病

自称詞として「自己格尔」と出ているが、現代中国語では「己」が抜けて「自格尔」のほうが普通になっている。

ヨーイワエスレン ツ チ コール テンツヨナウタイシヤウホン
有一位僧人,自己格尔 自身二, 點着腦戴 烧 痕 頭ノ灸アヲヲ指シ示ス
ウヲ ツ チ コール ツワンシヤンハイタイライティ
我自己格尔 從 上海 帶來的

同時代の英国人の編集した北京語テキスト『語言自邇集』(1867)にも下記の例のように、同様の表現が見られる。

* 若是我自己個兒不辦,必招上司的挑斥。

3.2.2 二人称尊敬語の言い方

北京語にはいつ、どういう形で敬語の「您」を表しているかが関心事の一つであるが、ここでは「你+囊」でその敬語意識を表しているのはいか思われる。

ラウニーナンチャ ティウヲ ヤヲ ウヲシヤンサウフハン メョーチン
* 勞你囊 寫你囊家ト八 貴公ト云コト 替我 熬 藥 我想掃房 沒有助

ラウニーナンチャ ティウヲサウイ サウ
勞你囊 寫苦勞ナガラ 替我掃一掃

ニーナン ティウヲマイカイチユイ
* 你囊 替我 買艾去 モクサラ買ヒ来レ

ニーナンティウヨリヨイロ
* 你囊替我熱一熱 我力為ニアタ、メテクレヨ

ニーナンハウ シ ユエハウ
* 你囊好 先生ハイカマ 師曰好 恙ナシ

冒頭のセンテンスの注釈「你囊家ト八貴公ト云コト」からもわかるように、これは尊敬語の「您」を言い表している。それ以前にむろん洋学資料の中には外国人宣教師のそうした記録も見えるそうだ。内田慶市(2001)によれば、Premare (Joseph Henri, 1666-1735) の「Notitia Linguae Sinicae」(1831) はラテン語で書かれた中国語学書であるが、マーシュマン、モリソンに続くものであり、二人稱「Nin」の発音が「gin」と表記されている¹⁴⁾。

3 2 3 反復疑問文 (VN 否定 V):

- チヤウツヲチヨ ブ ツラ
 * 叫 坐車不坐車夫ノ言
 シカヲシフーリ ブ シ タアブ シフーリ
 * 是狗是狐狸不是 答不是狐狸
 ウェン シワーブ シ タア シ
 * 問 是蛙不是 答是
 ヨーハウシエンシヨシヨメヨー ヨーハウタイフメヨー
 * 有好 先生 没有 有好大夫没有
 ヨーホワメヨー ヨーヤヲチヤウツメヨー
 * 有火没有 有藥吊子没有

上記の例文のように、反復疑問文は「VN 否定 V」の一パタンしか見られない。また、「^{トシライスーライライ}通來師來來 キテクレヨ」のように動詞の重なりをもって命令・要求を表すこともある。

3 2 4 文末辞

「了 / 拉 / 來」をもって動作の完了や過去をあらわしている。

- タアマイ ラ ウヲマイ ラ リヤン
 * 他賣拉 我買了兩
 ツワラントー フ タン ナ ラ ライ
 * 作 碗豆 腐湯 豆腐汁可ナリ 掣拉來
 バ ハイシン ブ シン シン ラ シヤンチヨバイ
 * 八百行不行 行拉 上 車 罷車ニノリタマヘ
 ユウスーフホフアルスーアー ウイ シ モクワイローラー
 * 又似乎花而樹阿 為甚麼 快落了阿

また、文中において仮定を表すこともある。

- タアヤウ ラ チ タラ バンイェサンコンライチヤン
 * 他要拉知道窮人之ヲシラハ 半夜三更來 搶 夜半ニ來テ盗ム

14) 内田慶市(2001)を参照

3.2.5 使役

使役については「教」を使っているだけで、現代語の「讓」は見られない。

ヤウトーチュワン イ フ ベー ヤウチャウトンツヲ スイチャウバーペイ
 * 要多 穿 衣服 別ナカレ 要 教 凍着 寒ニ中リテハアシト 睡 覺 把 被
 カイハウ
 臥 蓋 好 夜分八大ナル夜具ヲ用ユヘシ
 ベー チャウシヨウイエハン
 * 別ナカレ 教 受 夜寒 夜分ノ寒氣ヲ用心セヨ

4. 表音の異同

西洋人のようにローマ字をもって表音することの少ない時代に、小栗栖は従来のように仮名によって中国語の読みを示していた。その表音法はいままでの南方音によるものと大いに違っていた。ここではまず「五十音図」における日中の対応を見、それからかれの表音の全体図を眺めてみようと思う。

4.1 五十音図

明治六年の『北京説話』に日本語の五十音図を中国語で表記するものがあった。

阿	伊	。悪	咽	窩	空其口讀嘸音
ア	イ	ウ	エ	ヲ	
迦		古	革。	寬。	
カ	キ	ク	ケ	コ	
薩	西	思	歇音	双。	
サ	シ	ス	セ	ソ	
答	計	卒	爹	奪	
タ	チ	ツ	テ	ト	
拉	尼	奴	捏	挪	
ナ	ニ	ヌ	子	ノ	

明治初年日本僧の中国語体験

哈	奚	弗	嚇	呵
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
媽	謎	母	穀	麼
マ	ミ	ム	メ	モ
鴉	伊	油	也	邀
ヤ	幷	ユ	エ	ヨ
喇	力	鹿	。列	肉
ラ	リ	ル	レ	ロ
窪	伊	油	也	窩
ワ	イ	ユ	エ	オ

ここにおいてア行の「ラ」とワ行の「オ」は現代の五十音図と書き方が逆の位置にありながら、両方とも中国語の漢字「窩 wō」を使って音を表している。漢字の発音からすればワ行の「を」の発音を模写することとなる。また、イ、幷が二種類出ているが、漢字表記は全部で「伊」に統一している。一方、ア行のエは「咽 yàn」、ヤ行のエとワ行のエは同じく「也 yě」を使っているところからみれば、三者は同じ発音ではないようにとらえている。

ナを「拉」、ラを「喇」と異なる漢字で書き分けているが、北京語自身では両漢字はともに「la」の発音となり、『北京紀事』本文では「拉」、
「喇」をともに「ラ」と表音しているから、やや疑問に感じられる。むろん、中国西南地域の出身の人では日本語習得においてナ行とラ行の混同がよく見られるという母語干渉の現象の反映と関係するならば、もしかしたらそちらの出身の中国人に日本語を聞かせた結果かもしれない。

上記の五十音図において、唯一漢字で当てられない音が「キ」であって、小栗栖自身はこのように説明している。

北京本来、「キ」ノ音ヲ缺クニ似タリ、故ニ「キ」ノ字ヲ念シテ「チ」トス、北京ヲ「ペイチン」ト念スル等是ナリ。予イロ八五十韻ヲ本然

二訳セシムルニ、「カキクケコ」ニ至テ、「キ」ノ音ヲ念シ得ズ、曰ク、本来「キ」ノ字ナシト。想ニ湖北以外、已ニキノ音アリ、湖北人ノ京ニ在ルモノ、北京ヲ念シテ、「ボキン」トス、北京人或ハ「キ」ノ音ヲ聞テ、「チ」ノ音ト做ス歟。故ニ本書徹頭徹尾、一箇ノ「キ」ノ音ナシ、看ルモノ之ヲ知シ。(『北京紀事』凡例)

清末の日本語教科書でも、他の音についてほとんど一漢字をもって音を模写しているのに、唯一この「キ」について「克 - 伊之切」と標記し、反切の原理で、ki の音を求めることがあった¹⁵⁾。

明治後期の『華語蛙歩』(浅井新太郎)上編に「北音平仄譜」があり、同じように、五十音図の枠組みの中に中国語漢字の読みを押し込めて中国語と日本語の両者の音声上の類似性を示している。

4.2 岡島冠山と現代との比較

「彼の表記法には明治大正の華語研究家の大部分が陥っている音韻学的形式主義などは少しもなく、耳に聞いたままを簡潔に、すなおに記述している。しかしまた一面においては「リラン」(然)、「シサン」(山)のように精密な表記をも工夫しているのである。また、日本人が北方華語の音声を實地に組織的に記述したもものとしては、恐らくそれが最初の文献であろう。」と、『幼学須知假名附全』における表音のことを、魚返善雄は褒めている¹⁶⁾。

彼自身も意図的に同一字の異なる音を反映させようとしている。たとえば、『北京紀事』凡例に次の二点を挙げている。

北京人ニシテ、各其音ヲ異ニスルアリ、恩ノ字ノ如キ、「オン」ト念スルアリ、又「ガエン」ト念スルアリ、實地ヲ踐履シテ、之ヲ竭スヘシ。

15) 新智社編輯局編纂『実用東語完璧』(新智社、1905)7頁

16) 魚返善雄(1947)17頁

平上去入二随テ、音ノ転スルハ常理ナルニ、一韻内ニ在テ、語路言便
二随テ、音ノ転スルアリ、覺ノ字ノ如キハ、覺生寺ノ覺ヲ「チュフ」
ト念シ、正覺ノ覺ヲ「チュエ」ト念シ、睡覺ノ覺ヲ「チャウ」ト念ス
ル如キ、意ヲ得テ疑ヒナキヲ好トス。

前者について、たしかに「七月以来受你恩不少(シヨウニーガエンブシャ
ウ)」,また末尾にある地名表記の「思恩府」に「スーガエンフ」との読み
をつけているが、意外にも「オン」の読みが見当たらない。普通、地名と
普通名詞との違いを際立たせるために区別しているはずであるが。後者に
ついて覺生寺を「チュフションスー」、覺海寺を「チュフハイスー」と呼
んでいるのが確かだが、同じく寺院の名前について大覺寺を逆に「ダァチ
ヨウスー」と呼んでいて統一されていない。さらに、「一夜不能睡覺(ス
イチャウ)」,「天暖不覺(プチャウ)掀被」のように、現代語では「jiào」
「jué」と区別されるべきところを、おなじ「チャウ」で混同している。し
かし、

* 好吃的貴, 不好吃的便宜(ピエンイ), 你随便(スーピエン)。(『北京
紀事』十一号)

のように、前者の「pián」と後者の「biàn」を半濁音と濁音でちゃんと読
み分けている。

ここで、岡島冠山の表音との違いを、先行研究の資料¹⁷⁾に照らし合わ
せながら、下記のような表1にまとめることができる。

なお、表音の変化はおもに『唐話纂要』から『北京紀事』への仮名の異
同を示すもので、現代中国語の仮名表音についてはあくまで参照物として
挙げているだけである。

17) 岡島冠山の『唐話纂要』(1716年頃)の表音について張照旭(2014)に挙げ
ている「分紐分韻表」を参照。そして現代語の表音について、千葉謙悟・熊
進の『身につく中日・日中辞典』(三省堂, 2008)を参照。

表1 仮名表記変遷表

表音の変化	例 字	『唐話纂要』 (1716年頃)	『北京紀事』 (1875年)	『身につく中日・日 中辞典』(2008年)
コ ク	工, 供	コン	クン	コン
	孔	コン	クン	コオン
キ チ	記, 吉	キ -	チ	チー
	騎, 気	キ -	チ	チィ
工段 オ段	隔,	ケ	コ -	コア
	勒	レ	ロ	ロア
	特	デ	ト	トア
	厚	ヘウ	ホ -	ホウ
工段 ア段	口	ケウ	カヲ	コオウ
	白	ベ	パー	パイ
長音 短音	字	ツウ	ツ ^o	ツー
	助	ツヲ	ツ ^o	ちゅー
	吐	トウ	ツ ^o	トゥ
	祖, 粗	ツヲ	ツ ^o	ツウ
濁音 清音	大	ダァ	タァ	ター
	十	ジ	シ	しー
	直	ヂ	チ	ちー
	朋	ボン	ホン	ポアン
	愁	ツエウ	チヨウ	ちよおう
	兆	チヤウ	チヤウ	ちゃお
入声韻尾消失	p 法	ハ	ファ	ファー
	k 玉	ヨ	ユエ	イユ
	t 物	ウエ	ウ	ウー
	越	エ	ユエ	イユエ
	烈	レツ	レ	リエ
三仮名 二仮名	恩	エヘン	オン	エヌ
	孫	ソラン	スン	スヌ
	盆	ベエン	ボン	ペェヌ
二仮名 三仮名	懷	ワイ	ホワイ	ホオワイ
	房	ワン	フハン	ファン

上記の表で示されるように、南京音とされる『唐話纂要』に比べて、『北京紀事』の北京音はあきらかに現代中国語に近いことが当然といえば当然であるが、『唐話纂要』との違いを次のいくつか挙げることができよう。まず、「工、供、孔」は「コン」から「クン」に、「記、吉、騎、氣」は一律「キ」から「チ」に変えられていた。そして母音も工段から才段、或いはア段へ変える傾向を見せている。さらに本来、止撰、遇撰にあってそれぞれ異なる「字、助、吐」が「祖、粗」とともに「ツ」に統一されている。目立つのは南京音の濁音が北京音の清音に変わる点ぐらいであった。入声韻尾の消失は南京音にもすでに見られるが、北京音のほうがより徹底的と言えよう。その他、本来三仮名で表音している南京音を、小栗栖のほうはそれを二仮名と簡単化してしまうのが多い。その逆はむしろ少ないほうである。

つまり、一年間という短い滞在で聞き分けた、あるいは書き分けた音が先学に比べると実には多くはなかった。全体からみれば、どうしてもその仮名の付け方が簡素に見えてしまう。それは小栗栖自身が中国へ行く前に、先に南京音を勉強したこととも関係していると思われるし、その後の、たとえば明治二十一年(1888)編纂された呉大五郎、鄭永邦の『日漢英語言合璧 AN ENGLISH CHINESE AND JAPANESE CONVERSATION』の仮名表音に比べれば、その差が歴然である¹⁸⁾。

5. 今後の課題

明治初年に記録した中国語をどのようにとらえるべきかはいくつかの課題が残されている。明治六年十月八日、小栗栖は北京に着いてまもなく、北京の俗語を勉強したくてさっそく本然との筆談が始まる。問答形式でさまざまな事について応対があった。たとえば「問中土座位、及応接礼」の

18) その表音はあきらかに Wade の『語言自邇集』(1867)の影響を受けることと関係があろう。

問いに対して、その答えは「座位不特定左右。大約與門近者、為東席、與門遠者、為客位。請教讀師、必就西席。西席從古尚右（座席は左右を決める必要はなし、大体門に近いほうが主人の席で、門に遠いほうは賓客の席だ。先生に教を乞う際、必ず先生を西の席につかせる。西の席でも古来右側のほうが尊ばれる）」というのだった。そうした思想と文化との比較において、ほかにイスラム教への偏見や、阿片、纏足、汚い、怠けなどの中国人の悪習、具体的にはどうやってトイレに行くことさえも記されている。さらに日本と中国の地域の比較もおもしろい。「天津はたくさんの船が往来し、まるで我らが日本の大坂のようである。通州は天津の商船が往来し、まるで日本の伏見のようである。北京は通州の車馬が往来し、まるで日本の京都のようである。日本では、大坂から伏見まで百三十里あるが、汽船に乗れば一日に二往復する。この河に汽船があれば、一日で北京に着くことができる。」と、天津と大坂、通州と伏見、北京と西京などを比較しながら、故郷を思う心情や、中国の交通状況の悪さなどについて、著者の体験が記されている。そして中国の科挙試験や日本の百姓一揆をも紹介している。そうした個々の記述について文化史的視点からより詳細な研究を必要とする。

言語の面からみれば、これらの資料はまず当時の北京俗語を記録した意味として評価できよう。今日にすでに失いつつある表現や、言葉があっても意味的に把握できない語や、さらにいままでの俗語辞典に収録されていない語などを、日本語訳がついてあるという強みを生かして、その中国語としての意味の不確定性を解消させるには俗語集の形で編集しなおすことが喫緊の要務であろう。また仮名による表音に関しては、あきらかに従来のもとの異なる反面、小栗栖独自の言語特徴を浮き彫りにすることができる。それらをふまえて、当時の日本語をも中国語との比較という視野でとらえることができ、新たな言語事実の発見につながることもなる。

明治初年日本僧の中国語体験

参考文献

- Thomas Francis Wade (1867) 『語言自邇集』 Shanghai.
- 呉大五郎・鄭永邦編著 (1888) 『日漢英語言合璧 AN ENGLISH CHINESE AND JAPANESE CONVERSATION 』, 明治二十一年十二月
- 高倉正三 (1943) 『蘇州日記』 弘文堂, 昭和十八年一月
- 魚返善雄 (1947) 『蓮舶上人北京話 明治六年小栗栖香頂の留学記録』 『桃源』 昭和二年十一月 (1957-58) 『同治末年留燕日記』 (上下) 『東京女子大学論集』 第八卷第一, 二号, 昭和三二年十一月, 昭和三十三年十二月
- 任明 (1953) 『北方土語辞典』 上海: 春明出版社, 一九五三年
- K. O. ライシャワー (1963) 『世界史上の圓仁 唐代中国への旅』 (田村完誓訳) 実業之日本社, 一九六三年
- 陳剛 (1985) 『北京方言詞典』 北京: 商務印書館, 一九八五年
- 李思敬 (1986) 『漢語“儿”音史研究』 北京: 商務印書館, 一九八六年
- 安藤彦太郎 (1988) 『中国語と近代日本』 岩波新書, 一九八八年
- 六角恒廣 (1999) 『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』 東方書店, 一九九九年七月
- 内田慶市 (2001) 『近代における東西言語文化接触の研究』 関西大学出版部, 二〇〇一年
- 奥村佳代子 (2007) 『江戸時代の唐話に関する基礎研究』 関西大学東西学術研究所研究叢刊 28, 二〇〇七年四月
- 木場明志編 (2004) 『小栗栖香頂師百回忌法要記念 教法のため 人びとのため 小栗栖香頂師の実績』 法雲山 妙正寺, 二〇〇四年四月
- 陳継東 (2000) 『1873年における日本僧の北京日記 小栗栖香頂の『北京說話』 ()』, 『国際教育研究』 第20号, 東京学芸大学海外子女教育センター, 二〇〇〇年
- (2005) 『明治初年日本僧の北京見聞録 小栗栖香頂とその『北京紀事』』 『武蔵野大学オムニバス仏教講座 - 仏教の多様性に学ぶ』 二〇〇五年
- 陳継東・陳力衛 (2008) 『北京紀事・北京紀游』 北京: 中華書局, 二〇〇八年
- 張照旭 (2014) 『『大清文典』の中国語カナ表記について』 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第37号』

(本研究は2014年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である)